

Mark Strand 詩における自己の不在
— *Blizzard of One* —

中 村 敦 志

要 約

詩集 *Blizzard of One* (1998) は、“Untitled” から始まる。その中には別の詩が含まれるものの、この詩自体には題名が無い。なぜ、Mark Strand は、このような無題の詩から始めるのだろうか。それは、ストランドが、自己の不在性について探究していることに関わっている、と筆者には思われる。本論は、“Untitled” への疑問をきっかけに、3つの視点から *Blizzard of One* に見られるストランド詩の変化に着目する。まず、“Untitled” と同様に、過去に関連する6篇の詩を取り上げる。これらの詩は、過去の亡霊に囚われながらも、闇夜から逃れて光を目指そうとする一面がある。次に、主題の鍵を握る4篇を扱う。この中で詩人は、過去を嘆いているだけではない。失われた時間の意義を再考して現在に生かし、未来へ繋げる可能性を見出そうとしている。過去のストランド詩には見られなかった一面だ。最後に、初期の代表詩の一つ “Keeping Things Whole” との比較を試みる。「自己の不在性」という主題について、ストランドの捉え方に変化が見られる。空虚な自己の存在を受け入れ、新たな自己を見詰めなおそうとする詩人の姿がある。それが、この詩集に見られるストランドの変化だと言えよう。

キーワード：Mark Strand, *Blizzard of One*, 自己, 不在, 変化

1. “Untitled”

詩集 *Blizzard of One* (1998) は、“Untitled” で始まる。Mark Strand がこれまでに発表した詩の中で無題のものはなかったが、なぜこの詩だけに題名が付いていないのだろうか。この「無題の」詩の中では、“The Adorable One” (「いとしいもの」) という名の詩が言及される。

As for the poem The Adorable One slipped into your pocket,
Which began, “I think continually about us, the superhuman, how
We fly around saying, ‘Hi, I’m So-and-So, and who are you?’”
It has been years since you bothered to read it. . . .¹

語り手が少年の時に、ある少女を意識して書いた詩だ。超人のように空を飛びながら、英雄気分で架空の名前を名乗り、あなたは誰と聞く。子ども特有の自由気ままな発想で描いた詩だ。これが過去の思い出として心に残り、回想される。少年の頃に書いた詩“The Adorable One”に、なぜ未だにこだわっているのだろうか。この詩は、なぜ無題のままなのだろうか。このような疑問を残したまま、詩は次の問い掛けで終わる。

The lavender turns to ash. The clouds disappear. Where
Is she now? And where is that boy who stood for hours
Outside her house, learning too late that something is always
About to happen just at the moment it serves no purpose at all?

“Untitled”について James Nicosia は、“as the first poem in the collection, there will be words to follow” (216)と指摘する。この詩は、これで終わっているのではない。続きが、後の詩によって語られる。この1篇では完結していない詩。詩集全体の一部に過ぎない。従って、今の段階では、まだ「無題」となっているということだ。一方、この詩集全体が主題を見失っていると批判する意見もある。Sarah Manguso は、“The poems . . . are missing their subjects. . . . Where, indeed, is the couple of this poem? Are they the runaway subject of the rest of the book?” (168)と、疑問を投げかける。“Untitled”の少年と少女は、名前も過去の時も失ったまま、詩集の世界の中でさ迷っている、と見なす。しかし、「主題を見失っている」というのではなく、むしろ、「不在」という主題をこの“Untitled”は扱っているのではないかと筆者には思われる。

1998年にピューリッツァー賞を受賞した *Blizzard of One* の評価について、Harold Bloom は、“Writers and scholars claimed that this was Strand writing at his best, with a fully developed voice and balance they had not seen before” (16)と述べている。ストランド詩の集大成と見なす評価だ。これが最後の詩作という訳ではない²。だが、「成熟した声と今までになかったバランス」が見られると言う。ストランドが、自己存在の不安について関心を抱き、自己の不在性というテーマを中心に詩を書いている点は、旧作と変わらない。だが、不安を描くからといって、詩人の精神が必ずしも不安という訳ではない。どのような視点でどう変化しているのか。旧作と比べて、どのような変化が見られるのだろうか。

本論は、“Untitled”への疑問をきっかけに、*Blizzard of One* の中で関連する詩について考察を進める。前回の拙論では、「ブリザードが起きるかもしれないという不安が、この詩集には絶えず漂っているのだ」と結論付けた(中村11)。その後の研究動向を踏まえながら³、前回の解釈を発展させる。そして初期の代表詩“Keeping Things Whole”との比較を試みることで、ストランド詩に見られる変化に着目する。結論として、主題を見詰めるストランドの視点が変わ

化し安定してきている、と論じてみる。

2. 記憶の亡霊

上述の“Untitled”は、子どもの頃を書いた詩についての回想だった。“Untitled”が入っている第I部には、同様に、過去にまつわる詩が多い。“Untitled”との接点を探りながら、6篇の詩を以下で取り上げて考察する。

“The Beach Hotel” (4)の語り手は、現世から一時的に逃れて、海辺のホテルに来ている。バカンス気分のつもりだったのだが、1年間も居残ることになる。多くの死者が眠るビーチホテルで、語り手も、いつの間にか死者の仲間入りをしそうになっている。「太古の月光」 (“The ancient moonlight”)が床を這う。死の闇が迫る (“waves of darkness . . . / Will cover us”)。1年だけのつもりが、やがて「埃」 (“The dust”)を被り、過去の記憶の中に埋もれ去って行く。つまり、いつでも起こり得る死の可能性についての暗示だ。ホテルの地下墓地に眠る死者は、ひょっとしたら自分だったかもしれない (“the bitter remains of someone who might have been / Had we not taken his place”)。“Untitled”と同様に、記憶に埋もれた塵が、消えずに残っている。だが、ここでは淡い思い出ではなく、厳しい死の可能性を突きつけられる。

この“The Beach Hotel”では、生存しているはずの自己が、次第に消滅して行く経過が描かれる。存在から不在へと変わってゆく過程だ。一時的に現世から離れているつもりが、知らぬ間に存在を忘れ去られる。自分の居場所を失い、やがて死者の仲間入りをして行く。その可能性がいつでもあると暗示した詩だ。

死の闇に近づいている上記の詩と同様に、“Old Man Leaves Party” (5)も闇夜に向かう。語り手は、年齢が「80歳を越えた」老人だ (“I was over eighty”)。それでも、“I still had / A beautiful body”と、体にはまだ自信があった。忘れ去られたくないという思いが強く残る。現役で活躍していた世界から去って行く。それが分っていながらも諦め切れない。現世に未練を残しながらも、実際は存在が消滅して行く老人の心境を描いた詩だ。

ここまでの3篇は、いずれも過去を振り返るだけだった。それに対して、“I Will Love the Twenty-first Century” (6)は、未来についても言及する。この詩の解釈は、結末部分にかかっている。ある男が、語り手に向かって言う。21世紀に大きな期待は抱いていないと。この男は過去を「無」と捉える。過去の闇、過去の重みは私たちに何も教えない (“I love the past, the dark of it, / The weight of it teaching us nothing, the loss of it, the all / Of it asking for nothing”)。過去から現在に生かせることが何もない。単に過ぎ去った過去として終わっているだけで、現在に繋がりを持たない。そう言うのだ。来るべき21世紀の方が、過去よりもましだと見なしている。その理由が、とぼけている。真っ白の雪道 (のような白紙の未来) に「何の足跡も残さない」からだと言う (“I will love the twenty-first century more, / For in it I see someone in bathrobe and slippers, brown-eyed and poor, / Walking through snow without

leaving so much as a footprint behind”)。過去は重圧を与えるだけで何も教えないし、何も求めない。過去から得るものは何もない。それに比べて、21世紀は何の足跡も残さないと言う。未来に何の期待も抱いていないからだ。後世に残すべきこともないだろうと、白けている。

ただし、完全に絶望しているかと言うと、そうでもない。「無」の足跡を残すことに期待しているところが、この“*I Will Love the Twenty-first Century*”の特徴だ。何の足跡も残さなかったと分るだけでも、21世紀が存在したと言える。何も残しないと否定的に見るのではなく、「無」を残したことによって、存在したと分る。いささか皮肉だが、それでも存在を認めようとしている。将来を完全に悲観するのではなく、冗談を言って受け入れようとさえする。そこに若干の心のゆとりが窺える。21世紀についての意外なコメントを男から聞いて、語り手は、“*Oh, I said, putting my hat on, 'Oh.'*”と戸惑いを表す。未来をどう見るかは、受け止め方次第である。

“*The Next Time*”を締めくくる第Ⅲ部(9)は、上述の4篇にはなかった変化が認められる。“*It could have been another story*”と、別の過去があったかもしれない可能性を仮定する。過去を後悔し、もう一度やり直したいという願いの表れだ。しかしそれは本当に望んでいたことではない(“*Living like this . . . Is not what we wanted*”)。“*The Next Time*”では、「記憶と喪失の亡霊”(“*the ghosts of memory and loss*”)を蘇らせることが難しい(*Publishers* 1)と指摘されている。結局この詩は、過去の亡霊に付きまといられているのだ。

予定されていた物語として、理想とする日没の風景(“*a day in the west when everything / Is tirelessly present*”)を詩人は思い描いてみる。この風景は、「確かにとてもシンプルで近視眼的だ”(“*overly / Simple no doubt, and short-sighted*”)。ここがタイトルと結びつく。「近視眼的」とは先見の明のないこと。先のことを見越さずに、目の前にあることしか見ようとしなない。今、風に揺られている木々の葉も、やがては枯れ散ってしまう(“*For soon the leaves, / Having gone black, would fall*”)。自然は季節の変化と共に変化する。秋の次には冬が来る。タイトルの“*The Next Time*”は、次に来る季節のことでもある。雪が降れば、今、目の前に見える全てを覆い隠し、冬の間、存在を消してしまう。これも不在の一種と言える。

消えて行く日没の景色を眺めながら、過去は変えられないと自覚する。その上で、今日の一日を後悔し反省する。ただ絶望に終わるのではなく、明日への再出発を願うところに、この詩の希望が託される。前述の4篇の詩には見られなかった変化だ。未来とか次の時代などと大げさに考えるのではない。生きていくことは、結局は日々の繰り返しに過ぎない。今日をどのように生きたかを思い出す。過去を修正してやり直すことはできないが、その反省を明日に生かす。神頼みではなく、夕陽に同情を願うほかに術は無い。他にどんな方法があるというのかと問う(“*What else would there be / This late in the day for us but desire to make amends / And start again, the sun's compassion as it disappears?*”)。沈む太陽は目の前から消滅するが、明日になればまた東の空に姿を現す。完全なる消滅ではない。夜の後には朝が来ることに、希望を持つとうとしている。

Blizzard of One の中で初出なのは、“The Night, The Porch” (10)のみである。他は全て、雑誌に発表されたものの再録である。そのためか、この“The Night, The Porch”は、*Blizzard* のために書いたと思われるほど、重要なテーマを扱っている。

上で論じた詩“The Next Time”Ⅲは夕方終わっていたが、その後続くかのように、この詩の時間は夜。前の詩の結末で、沈む太陽に同情を求めたい気持ちになったのは、その後夜闇が訪れると分っているからだ。ストランド詩で頻出する夜は、「幽霊のような夜景」(“a spectral nightscape” [Muratori 113])と評されている。不吉な闇夜になったとき、どのような気構えで、闇を受け止めるか。それが、この詩の課題だ。夜の暗闇の中では、昼間見えていた存在が見えなくなる。この消滅が、死を想像させる(“To stare at nothing is to learn by heart / What all of us will be swept into”)。昼間の風は、“the wind sings its circular tune”というように、葉を揺らし自然の調べを奏でていた(“The Next Time”Ⅲ)。しかし夜になると、我々の存在をゴミのように吹き飛ばしてしまう破壊的な風となる。

この詩で見られる新展開は、次の点だ。「季節や天気以上に願うのは、少なくとも自分にとって／他人でいる心地よさ」(“What we desire, more than a season or weather, is the comfort / Of being strangers, at least to ourselves”)。同じ自己でいるのではなく、日々新しい自己へと変化する。過去の自己とは決別し、別の自己となる。自己が変化することに心地よさを願うというのは、ストランド詩において新たな境地だ。常に変わる新しい自己を求める。つまり、今ある自己に満足するのではなく、未来に向かって変わって行く新たな自己を目指したいというのだ。直前の詩“The Next Time”の後を受けるかのように、「次の時」に向かっての自己変化を望んでいる。過去を後悔して振り向いているのではない。今は夜だが、夜が明けて明日になったとき、今とは違う自己になりたいと願う。

闇を見詰めることで、そのように感じとることができた。それが以前の自己とは別人になるということ。新しい認識を得て変化した。本には多くの知識や情報が書かれている。しかし今感じ取ったことは本から得られる知識ではない(“The book out there / Tells us as much, and was never written with us in mind”)。闇を見詰めて思索することで得た理解。そのような理解を求めて、前進しようとする(“There is no end to what we can learn”)。

「盲目であることに盲目ならば、視界は開けるだろう」(“If blindness is blind to itself / Then vision will come”)。“Precious Little” (11)は、一見、光明が差したかに思える詩である。しかし、何も見えていない事実を目をつぶってしまえば、何か見えたとしても「幻影」(“vision”)に過ぎない。

詩の中盤で描かれる光景は、闇の外に溢れる光の世界。視界が開け、伸び伸びとした自然の光景が広がる。詩人が理想に描く世界のような。しかし、それは幻影に過ぎない。なぜならば、その光景の中で吹く風の音は、実は本物の風ではないかもしれないからだ。闇から逃げて走る「音」かもしれない(“Is it really the wind, / Or is it the sound of somebody running / One

step ahead of the dark?”)。そのような不安があるために生じた疑問だ。

結末の「失われた盲目」(“blindness lost”)とは、冒頭にあった「盲目であることに目をつぶること」だ。そうすれば幻影を見ることはできる。最後の「回復した盲目」(“blindness regained”)とは、盲目であることに目をつぶっても、所詮見えるのは幻影だと知る。その結果、盲目であると受け入れること。これが今の詩人の心境だ。どちらも同じ盲目だが、大きな差がある。死ぬべき運命を暗示する闇の中にも、その闇を恐れない。闇から目を逸らさずに、闇の中の無を見詰める。つまり、闇を受け入れる覚悟があるかどうかだ。それを自問自答している詩人の姿が、この詩には見られる。

一見、前出の“The Night, The Porch”とは好対照の詩に見えるが、実はどちらも闇の中にいる詩人の気構えを描いている。タイトル“Precious Little”の“precious”を“very”と読めば、「ほんの少し」といった意味にも受け取れる(Nicosia 267-68)。依然として闇の中にいるが、闇を受け入れることで、「ほんの少し」だけ闇が見えて来る。

上記6篇の詩は、過去の亡霊に囚われながらも、闇夜から逃れて光を目指そうとする一面が見られる。“Untitled”での失われた記憶を取り戻そうとしているかのようだ。果たして *Blizzard of One* で、過去を取り戻すことは可能なのだろうか。詩集の中盤から結末にかけて、主題の鍵を握っていると思われる4篇の詩を以下で考察する。

3. 淀んだ時間

“Morning, Noon, Night”の第I部(18)は、ストランドらしい不気味な詩だ。朝起きると不吉な姿を空に見る。「黒いスーツを着て両手を広げたような姿」(“something like a bird, / But also like a man, black-suited, with his arms outspread”)が雲間に見え隠れした。ひょっとしたら黒い鳥だったかもしれない。しかし、人のように見えたのが不気味だ。それを不吉な印だと解釈する。そして、自分のこれまでの生き方が間違っていたことを暗示する兆候と受け取った(“I thought this could be a sign that I’ve been wrong”)。自分の中で、過去への後悔の念があるためだ。それは夢の中での出来事だった。目覚めると、ベッドの上に「未来の影が落ちた」(“the shadow of the future fell”)。過去の過ちに気付かされ、未来に不安を感じたのだ。海は液体の廃墟(“the liquid ruins / Of the sea outside”)に見え、建物は抜け殻(“the shells of buildings”)のように見えた。あの夢によって、すっかり見える世界が変わってしまった。不吉な兆候は空にも現れる。空が一天にわかにかき曇る。木々は身を折り曲げ、野原はひれ伏した(“A rapid overcast blew in, bending trees and flattening fields”)。天の怒りでも落ちて来るような異様な気配だ。早く去って欲しいと願う(“I stayed in bed, / Hoping it would pass”)。

ところで、なぜストランドの詩には、不気味な場面がよく描かれるのだろうか。現代人がなぜ詩を読まないのか、というインタビューについてのストランドの説明は、我々にそのヒントを与えてくれる。“They don’t want to feel the proximity of the unknown-or the mysterious.

It's too deathlike; it's too threatening. It suggests the possibility of loss of control right around the corner" (Shawn159)。人々は、未知なるものや神秘的なものを遠ざける。それは死を暗示し、人々を恐怖に追いやるからだ。ストランドの詩には、不安や恐怖などが多く描かれる。読者が日常生活で何となく気付きながらも目をつぶり、直視を避けている事象や問題のこともある。ストランドの扱う不気味な世界は、死を暗示する。それをストランドは詩の中で突きつける。だから、読者は不安になる。

“Morning, Noon, and Night” を締めくくる第Ⅲ部(19)は、夜を描く。ストランド詩に頻出する時間帯だ。結論部で、「いかに自分の人生が間違っていたか」(“how false his life had been”)とあるように、後悔の念が漂う詩だ。過去の後悔のために、今を生きられず、さ迷っている(“we fall asleep and stray to places”)。来るべき時間の中に解放されたいと嘆願する(“We . . . plead to be released / Into the coming day on time”)。実際は目的地に辿り着けず、時間の流れからはじき出され、当ても無くさ迷い続けている。そして、「真夜中の海で忘れ去られて漂うことを余儀なくされている」(“being forced to drift forgotten / On a midnight sea”)。これが、語り手にとっての夜だ。千年に一度しか船は見えない(“every thousand years a ship is sighted”)。前述の“The Beach Hotel”(4)では、現世に戻る船が来るまで1年待たねばならなかった。ここでは、千年もの長い時をたった一人で夜の海を漂い、どこにも辿り着けない。最後の描写が、この詩の決め手だ。溺れた泳ぎ手は、自分が溺れ死んだ事実を受け入れられないまま、無念の思いで海をさ迷う。死に切れないまま、自分の人生がなぜ誤っていたのかと問い続けるが、答えが見つからない(“a drowned swimmer whose imagination has out-lived his fate, and who swims / To prove, to no one in particular, how false his life had been”)。もしそのときに戻ってやり直すことさえできれば、今とは違った人生を歩んでいたかもしれないと後悔する。例えばそれは、冒頭の詩“Untitled”(3)で、少女への思いを告白できなかった少年時代への後悔とも重なる。

この詩では、過去から現在そして未来に向かう時間の流れが、とどこおっている。時間の淀みの中で、語り手は動けなくなっている。朝が来て、早くこの夜の悪夢から解放されたいと切望する。だが、この悪夢は、このままでは終わらない。たとえ朝になって目覚めても、“Morning, Noon, and Night” 第Ⅰ部(18)にあるように、不吉な夢に影響され、今度は、不吉な未来の影を見てしまうからだ(“Then I woke, / And on my bed the shadow of the future fell”)。

ほんの小さな雪の一片でも猛吹雪になり得る、と“A Piece of the Storm”(20)は暗示する。小さな現象や存在であっても、より大きなことの一部(“A snowflake, a blizzard of one”)であるかもしれない。深いところを探り、先まで見通す力が備われば、より本質的なことの前触れとして読み取ることが可能となる。一片の雪は、着地した瞬間に融けて消える。はかない存在だ。すぐに消滅する定めにある。そのまま見過ごしてしまえば、存在にすら気付かない。しかし、その小さな存在に気付き、思いを馳せることで、小さな雪の消滅も意義を帯びる。

序論で述べたように、前回の拙論では、未来に起こり得る不吉な猛吹雪の前兆として、一片の雪を捉えた。今回は、結末に着目して、読み直して見る。確かに、この詩には闇への不安はある。しかし、それだけではない。普段は見逃してしまいそうな小さな存在に、偶然にも気付いた。そのことへの喜びと期待が、結末には込められている。

A time between times, a flowerless funeral. No more than that
 Except for the feeling that this piece of the storm,
 Which turned into nothing before your eyes, would come back,
 That someone years hence, sitting as you are now, might say:
 “It’s time. The air is ready. The sky has an opening.”

その存在に気付いた途端に融けてしまった雪の一片だが、そのまま消滅してしまった訳ではない。この雪の一片（のような些細なこと）に、いつかまた別の人が気付く可能性がある。今の思いが、別の人の心に蘇る可能性があるということだ。それは、一篇の詩が、後になって読んだ人の心の中に蘇るようなものだ。例えば、冒頭の“Untitled”の中で少年の書いた詩が回想されるように。今の瞬間を将来誰かが同じように気付くことがあれば、正にそれは埋もれていた感情や、忘れ去られていた気持ちが新たに蘇るとき。そのときこそ目の前から闇が消え、視界が開ける時だ（“It’s time. The air is ready. The sky has an opening”）。このように、新たな始まりへの予感を秘めた詩、と読むことができる。

“A Suite of Appearances” I (21)では、「彼」の存在に「あなた」が気付く。それは、あなたが視線を上げて、揺れる葉を通して彼の影を見ようとした「瞬間」だ（“the moment when you / Would look up and see through the trembling leaves / His shadow suddenly there”）。このことは、彼が闇を出て来た（“Out of what dark or lack has he come”）と言うよりも、むしろ、あなたの方が、今まで見ていなかった彼の存在を意識するようになった、ということだ。見る者の心の持ち方次第で、未知の存在に気付く可能性があるとし唆している。「上を見る」（“look up”）という表現は、この直前の詩“A Piece of the Storm” (20)の中で、本を読んでいるあなたが「上を見て」（“looking up”）、その時に舞い降りてきた一片の雪に気付くのと類似した表現だ。

また、見えない世界から視界に入ってきた「彼」は、“A Piece of the Storm”での雪の一片を擬人化したものとも考えられる。前の詩では、ブリザードにもなり得る一片の雪が、軽くふわふわと（“weightless”）あなたの部屋に入って来る。そして、肘掛け椅子に舞い降りた瞬間に、本を読んでいたあなたが視線を上げて気付いた。同じように、この“A Suite of Appearances” Iでの彼も、ふわふわとした（“weightless”）リズムで闇の世界からやって来る。このふわふわとした軽いリズムとは、少し離れた闇の世界からはるばるやって来た者たちのリズムである

(“the weightless / Cadence of those who arrive from a distance”)。闇から光の世界までは、「少しの距離」(“a distance”)だが、その道のりは困難であり、彼にとっては「大海を越えて」(“over the Sea of Something”)来たようなものだ。しかも、闇から光の世界へと導いてくれるのは、ほんの「微かな光」(“a gleam”)に過ぎない。闇から彼が苦勞してやって来たのは、実はあなたを未知の世界へ導くためだ(“to catch you and carry you / And leave you where you have never been”)。いままで見えなかった彼の存在が見えるということは、彼の変化というよりも、むしろそのことに気付いたあなたの変化なのだ。その結果、今まで知らなかった新たな世界へ入って行く。一片の雪に気付いて、ブリザード(猛吹雪)が起きる可能性を予感する。不安があると、危険なブリザードのように思ってしまう。だが、ブリザードが過ぎ去れば、明るい光の世界が訪れる可能性もある。

“The View”(55)は、*Blizzard of One*の最後を飾る詩だ。過去のストランド詩とは違い、心の平安がある。日没後に迫る闇と夜への不安が見られない。昼から夜へと向かう変化を受け入れ、むしろ楽しんでさえいるようだ。今までになかったタイプの詩だ。日没は、ストランド詩で頻繁に描かれる。それは、昼間との別離の時である。ストランドが得意とする天気を題材に、別離の気持ちを日没で表している。

日没を見て受け取る気持ちは、以前と比べてどのように変化したのだろうか。別離とは、それまでであった関係が途切れて終わること。一種の不在を描いているとも言えるが、それを悲しみと受け取っていない点が重要だ。もしこの日、夕焼けが見られなかったとしたら、詩人の受ける印象は変わっていたかもしれない。夕焼けを見ることができたのは、単なる偶然なのかもしれない。タイトルになっている「その眺め」(“The View”)を美しいと素直に受け入れることができた。これが、この詩集でのストランドの心境だ。最終結論ではないにしろ、ある程度の心構えができている詩である。

結末の「その明白な事実が／あたかも充分であり継続するかのような一種の幸せ」(“a kind / Of happiness, as if that plain fact were enough and would last”)に思えるという表現には、注意すべきだ。今、日没を見て、満たされた気持ちになっている。だがそれは一時的なものに過ぎないと、詩人は分っている。例えば、日が沈んで夜になれば、違う気分になるかもしれない。また、雨とか雪で夕焼けが見えない日もある。そんな日には、今日とは違う気分になるかもしれない。David Kirbyが“In the poems weather is elemental, like language, sometimes accessible and sometimes mysterious”(80)と指摘するように、身近で神秘的な天気は、ストランド詩に不可欠な要素だ。天気と同様に、人生にもまた、これから様々な変化が訪れる。それを分り切った上で、人生が死へと向かっていることを受け入れる。それでも、全てが闇という訳ではなく、一時的にでも心が満たされる一瞬がある。その一瞬があると気付いたことに、ささやかな満足を味わっている。かつてのストランド詩に見られなかった変化だ。

冒頭の“Untitled”へのタイトルは未だ見つからないままだ。まるで、その不在性を暗示し

ているかのようだ。しかし、過ぎ去る時間を嘆いているだけではない。失われた過去の意義を再考して、現在に生かし、未来へと繋げる可能性を見出そうとする。これまでのストランド詩にはなかった一面が、*Blizzard of One* には見られる。

4. “Keeping Things Whole”

最後に、*Blizzard of One* と、初期の詩 “Keeping Things Whole” とを比較し、その変化について考えてみる。第1詩集 *Sleeping with One Eye Open* (1964) に収録されている “Keeping Things Whole” は、ストランド詩を代表する一つとして、アンソロジーなどに紹介されている。この40年間にストランドが一貫して探究してきた「自己の不在性」をすでにテーマとしており、ストランド詩の原点とも呼べる詩だ。

“Keeping Things Whole” では、自己の存在感が希薄である。自己の存在に不安があるからだ。

In a field
I am the absence
of field.
This is
always the case.
Wherever I am
I am what is missing.⁴

これは、他人に認められていないのではないか、といった種類の疑問とは異なる。本当に自分の居場所があるのかどうか、という疑問だ。自分がこの世に存在している実感が無い。そのため、あえて自分の今いる場所から移動してみる。すると、さきほどまで自分がいた場所が消滅するのが分る。

When I walk
I part the air
and always
the air moves in
to fill the spaces
where my body's been.

過去の居場所を消滅させることで、そこに自分が存在したと証明できる。何とも皮肉な証明の仕方だ。これでは、過去の自分を消すことによってしか、今の自分の存在を立証できない。今

という一瞬しか生きていないことになり、過去から今に続く自分の存在価値が認められない。ということは、自分の未来も見えないということだ。この時間の淀みをどこでどのように断ち切れるか。それが *Blizzard of One* でストランドが直面している課題と言える。

結末部について、徳永は「他者（事物）の存在を認識することへの配慮と敬意を隠してもいるように読める」（164）と示唆する。これは見落としがちな点だ。全体的にこの “Keeping Things Whole” は、自己の不在性について描いた詩と読める。しかしストランド詩の最後には落ちがあることを忘れてはならない。この詩は、次のように終わる。

We all have reasons
for moving.
I move
to keep things whole.

「私は動く／事物を完全にするために」。複数形になっている「事物」（“things”）は、他者としても読み取れる。過去の存在を消滅させると言うよりも、むしろ、新たな自己の居場所を他者の中に見つけようとする。他者の存在を認め、その中で自己の不在を補う。そのように自己の居場所を求めて進むことは、少なくとも後退ではない。新たな自己を求めて前進することに繋がる。もし今いる自己が、不満も問題意識も持たずに現状維持を続けるならば、自己の変化や成長はない。と同時にまた、他者も世界も変わらないままだ。自分が変化して、移動し続けることで、不完全な周囲の世界が変化して、完全になる（“to keep things whole”）とも言える。前述したように、“The Night, The Porch”（10）での語り手は、「少なくとも自己にとって他人でいる心地よさ」（“the comfort / Of being strangers, at least to ourselves”）を願っていた。そのような *Blizzard of One* での自己の変化を予言しているかのような結末とも読める。

最後にもう一度、“Untitled”（3）について考えてみよう。この詩で、少年の時の感情は完全に消滅したのではない。時は経過し、事物は変化する。花は散り去り、天気は移ろい易い（“The lavender turns to ash. The clouds disappear”）。しかし、花が散った後も仄かな香りを残すラベンダーのように、美しかった彼女への思いを詩に書いた時の気持ちは、今も消えずに残っている（“she was beautiful, / And the poem, you thought at the time, was equally so”）。少年の頃の経験が、貴重な思い出として心の中に残り続けている（“The dust of a passion, the dark crumble of images / Down the page are all that remain”）。同時に又、彼女に思いを告白できなかった後悔の念も未だに残っている。何時間も彼女の家の前に立っていた少年の頃の詩人は、迷いながらも結局何も伝えられなかった。その時間は過ぎ去ったが、決して消滅した訳ではない。新たな意味を帯びて蘇る可能性をまだ残している。こちらから気付きさえすれば、過去は蘇る。まるで、空から舞い降りてくる「雪の一片」（“A snowflake” [20]）のように、

過去の時間は、気付かれる瞬間を待ち望んでいるのだ。

ストランドの詩では、個性のない無機質な自己が描かれる場合が多い。主人公と呼ぶほどの個性を持たない。その空虚な人間像は、例えば、T. S. Eliot の *The Hollow Men* (1925) を思い出させる。エマスンやホイットマンの時代のように自己信頼や主体性を持ってない時代を描いているからだ(新倉 140)。そのようなストランドの詩の中にあつて、*Blizzard of One* では、主人公が主体性を持って、日没や闇夜といった目の前の現実に向き合う姿が見られる。ストランドの詩は具体性を欠き、「抽象性」(“abstraction”)が高いと言われる(Vendler 423)。それは、ストランドの描く自己の存在感が希薄であるからだ。確かに、新倉が指摘するように、「『自己』を検証しようと思えば思うほど『自己』が遠のいていく」(141) 傾向が、ストランドの詩にはある。初期・中期の詩は、虚無感と絶望感を残したまま終わるものが多い。今のストランド詩にもその傾向は依然として残る。しかし *Blizzard of One* の中では、本論で考察したように、遠のいていく自己に絶望したままで終わらない一面が見られる。空虚な自己の存在を受け入れようとする。自己の不在性から目を逸らさずに、向き合う。そのような自己を受け入れ、新たな自己を見詰めなおそうとする詩人の姿がある。それが、この詩集に見られるストランドの変化だと言えよう。

- 注 1. Mark Strand, *Blizzard of One: Poems* (New York: Knopf, 1998), 3. *Blizzard of One* からの引用は全てこのテキストに拠る。以後、詩の引用ページをタイトルの後の()内に記す。
2. *Blizzard of One* の後の詩集としては、*Chicken, Shadows, Moon & More* (2000)がある。
3. これまでストランドを単独に扱った研究書は、David Kirbyによる *Mark Strand and the Poet's Place in Contemporary Culture* (1990) のみだった。しかし、21世紀に入ってから、Harold Bloom 編集のストランド論集、*Mark Strand: Comprehensive Research and Study Guide* (2003) が出版された。続いて、ストランドを扱った最初の博士論文、*Between Two Great Darks: Reading Mark Strand* (2003) が、James Francis Nicosiaによって発表された。ようやく本格的なストランド研究が始まろうとしている。
4. Mark Strand, *Selected Poems* (1980; New York: Knopf, 1990), 10. “Keeping Things Whole” からの引用は、全てこのテキストに拠る。

引用文献

- Rev. of *Blizzard of One*, by Mark Strand. *Publishers Weekly* 245.17(1998): 62.
- Bloom, Harold, ed. *Mark Strand: Comprehensive Research and Study Guide*. Bloom's Major Poets. Philadelphia: Chelsea House, 2003.
- Kirby, David. *Mark Strand and the Poet's Place in Contemporary Culture*. Columbia, Missouri: U of Missouri P, 1990.
- Manguso, Sarah. “Where Is That Boy?” *Iowa Review* 29.2(1999): 168-171.
- Muratori, Fred. Rev. of *Blizzard of One* by Mark Strand. *Library Journal* 123.10(1998): 113.
- 中村敦志 「ブリザードは起きるのか? — Mark Strandの*Blizzard of One* —」, 『札幌学院大学人文学会紀要』第69号(2001年): 1-12.
- 新倉俊一 『アメリカ詩入門』(英語・英米文学入門シリーズ), 研究社, 1993年。
- Nicosia, James Francis. *Between Two Great Darks: Reading Mark Strand*. Diss. New York U, 2003. Ann Arbor: UMI, 2003. ATT 3089309.
- Shawn, Wallace. “The Art of Poetry LXXVII: Mark Strand.” *The Paris Review* 148(1998): 146-178.

- Strand, Mark. *Blizzard of One: Poems*. New York: Knopf, 1998.
— . *Chicken, Shadows, Moon & More*. New York: Turtle Point Press, 2000.
— . *Selected Poems*. 1980; New York: Knopf, 1990.
徳永暢三『アメリカ現代詩と無』, 英潮社新社, 1990年。
Vendler, Helen, ed. *The Anthology of Contemporary American Poetry*. 1986; London: I. B. Tauris, 2003.

The Absence of the Self in the Poetry of Mark Strand : *Blizzard of One*

NAKAMURA, Atsushi

Abstract

Blizzard of One (1998) begins with “Untitled.” This poem, referring to a titled poem within it, has no title for itself. Why does this collection begin with such an untitled poem? Mark Strand has been pursuing the theme: the absence of the self. It seems to be the reason. This paper, considering the question above, studies the poems in the collection from three viewpoints. First, some of the poems are haunted by ghostly memories, however, they try to go out of the dark into the light. Second, the poet in other poems does not merely regret the past, but he reconsiders the meaning of the lost past in the present to inquire the continuity into the future. Third, compared to “Keeping Things Whole,” one of his typical earlier poems, we notice a change in his attitude toward the theme. The poet accepts the existence of the absent self and contemplates the possibilities of the renewed self. It is a new phase in Strand’s poetry.

key words: Mark Strand, *Blizzard of One*, absence, self, change

(なかむら あつし 本学人文学部助教授 アメリカ文学専攻)